

アートシェアリングにおける'art as therapy'発生の 構造原理：芸術体験はいかにセラピューティック となりえるか

石田, 陽介

<https://hdl.handle.net/2324/1441327>

出版情報：九州大学, 2013, 博士（感性学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）



アートシェアリングにおける ‘art as therapy’ 発生の構造原理

－ 芸術体験はいかにセラピューティックとなりえるか －

Structural Principles on the Genesis of “art as therapy” Phenomenon in Art-sharing :
How could art experiences become therapeutic?

博士論文目次

序章 アートシェアリングとは何をさすのか

- 芸術体験において‘therapy’が発生しえる場の構造原理の究明にむけて

- I. 課題提起と研究の目的
- II. アートシェアリング
- III. 本論の流れ

第1章 ‘art as therapy’を巡るパイオニアの先行研究

- I. はじめに
- II. 先行研究にみるアートセラピーの発展史
 1. 芸術人類学の説く「芸術の誕生」
 2. 前近代から近代にかけての芸術を取巻く社会の変遷と精神病理の関わり
 3. 芸術と精神分析
 - 1) ジークムント・フロイトによる精神分析学
 - 2) カール・G・ユングによる分析心理学
 4. アートセラピーの誕生と発展
 - 1) イギリスにおけるアートセラピーの二人のパイオニア
 - 2) アメリカにおけるアートセラピーの二人のパイオニア
 - 3) 日本におけるアートセラピーの受容とそのパイオニア
- III. 芸術学へのアートセラピー理論の接続
 1. はじめに - 芸術学における‘被験者’という問題
 2. 芸術学の言分け構造におけるアートセラピー
 3. 考察 - ‘被験者’と表現者を包括する学際的アプローチとしての芸術体験論
 4. アートセラピーと芸術養生
- IV. アートセラピー理論における学術的争点
 1. アートセラピーの定義
 2. ‘art as therapy’と‘art psychotherapy’という二つの潮流

第2章 芸術体験におけるアートシェアリングの言分け構造

I. はじめに

1. 問題提起 - 研究の背景と目的
2. アートコンプレックス発生の時期
3. アートコンプレックス発生の起因

II. 先行研究

1. 状況的学習にみる芸術体験
2. ウィニコットの発達理論
3. 河合隼雄の「無意識の構造」理論

III. 芸術体験における人称性別分類の言分け構造

1. 芸術体験の人称性別分類の試み
2. 2人称芸術体験の構造モデル
3. 1人称芸術体験の構造モデル
4. 3人称芸術体験の構造モデル
5. 2.5人称芸術体験の構造モデル
6. 不定称芸術体験の構造モデル

IV. 考察

V. まとめ

第3章 精神科臨床におけるアートセラピー事例を通じたアートシェアリングの考察

I. はじめに

II. 絵画療法を処方する対象症例

III. 絵画療法を症例 Z に処方する目的

IV. 絵画療法を症例 Z に処方する方法

V. 絵画療法を症例 Z に処方した経過

1. 第一期：集団絵画療法室への導入期
2. 第二期：スタッフの絵を介し交流を持った時期
3. 第三期：描画活動への導入期
4. 第四期：自作を介し絵画療法室へ馴染んでいった時期
5. 第五期：他の参加者との交流を通し自ら居場所づくりを始めた時期

VI. 絵画療法を症例 Z に処方した結果

VII. 事例の考察

VIII. まとめ

第4章 2人称芸術体験を礎とするワークショップ事例を通じたアートシェアリングの考察

I. 問題と目的

II. 対象事例1 「ギャラリーコンパ」

1. 「ギャラリーコンパ」開催の概要とその目的
2. 「ギャラリーコンパ」開催の方法
3. 「ギャラリーコンパ」におけるアートシェアリングの実際
 - 1) 「ギャラリーコンパ」の実際展開
 - 2) 「ギャラリーコンパ」におけるアートシェアリングの展開事例
4. 「ギャラリーコンパ」にみる2人称芸術体験の構造

III. 対象事例2 「みみをすます絵本ワークショップ」

1. 「みみをすます絵本ワークショップ」開催の概要とその目的
2. 「みみをすます絵本ワークショップ」開催の方法
3. 「みみをすます絵本ワークショップ」におけるアートシェアリングの実際
 - 1) 「みみをすます絵本ワークショップ」の活動展開の概要
 - 2) 「みみをすます絵本ワークショップ」における展開事例の構造分析
4. 「みみをすます絵本ワークショップ」にみる2人称芸術体験の構造

IV. 対象事例3 「親子で廃材木琴づくりワークショップ」

1. 「親子で廃材木琴づくりワークショップ」開催の概要とその目的
2. 「親子で廃材木琴づくりワークショップ」開催の方法
3. 「親子で廃材木琴づくりワークショップ」におけるアートシェアリングの実際
 - 1) 「親子で廃材木琴づくりワークショップ」の実際展開
 - 2) 「親子で廃材木琴づくりワークショップ」の結果
 - 3) 「親子で廃材木琴づくりワークショップ」事例展開の分析
4. 「親子で廃材木琴づくりワークショップ」にみる2人称芸術体験の構造

VII. 考察 2人称芸術体験における‘art as therapy’発生の構造原理

1. 2人称芸術体験における「通過的儀礼の構造」と「自我の再適応装置の原理」
2. 芸術体験における‘art as therapy’発生の構造原理

第5章 地域創造に向けたソーシャル・アートセラピーのアクションリサーチ

- I. はじめに
- II. 研究の背景と目的
- III. 技法としてのソーシャル・アートセラピー
- IV. 事例対象地域の概観 - 福岡市箱崎地区の背景
 1. 千年の歴史を刻む箱崎のまち
 2. 箱崎地区の現在
- V. コミュニティアート活動を通じた箱崎における実践展開
 1. アトリエ H プロジェクトの概要
 2. 箱崎マンスリーアートワークショップ
 3. 箱崎千年会議、箱崎アートターミナル
 4. 箱崎音学童ピアノプロジェクト
 5. ハコザキボイス
- VI. 結果 地域社会におけるソーシャル・アートセラピー・アプローチの波及
 1. はじめに
 2. コミュニティアート活動の波及効果
 3. コミュニティアート活動における課題
- VII. 考察
 1. ソーシャル・アートセラピーの構造
 2. 地域創造におけるソーシャル・アートセラピーの位相
 3. 学びとケアを結わえ直す機能としてのソーシャル・アートセラピー

第6章 アートシェアリングのさし示すもの

- I. アートシェアリングからコミュニティアートへ
- II. 芸術体験がもたらしうるもの
- III. 今後の課題

参考文献

付録

謝辞

序 章 アートシェアリングとは何をさすのか

－ 芸術体験において‘therapy’が発生しえる場の構造原理の究明にむけて

I. 課題提起と研究の目的

芸術体験は、人に何をもたらさうるのであるか。

これは筆者が、精神科病院において疾患を抱えながら生き悩む方々のリハビリテーション治療にアートセラピスト（絵画療法士）として携わりながら、日々自問自答を繰り返していかざるをえなかった切実な問いであった。本論文では「アートシェアリング」というキーワードを用いながら、感性コミュニケーション学における探求を以て、この主題へと迫りたい。

本論文では芸術体験におけるユーザー、即ち「鑑賞者」あるいは「患者」の側に焦点を当て、芸術学や心理学、精神医学、深層心理学、人類学、哲学など多分野の研究を交えて論述を行う。個別の専門領域を超え、芸術体験を通してコミュニケーションを行う表現者と鑑賞者双方に向けた学術的視座の連結を図り、そこに跨がる感性と関係性に関する新たなサイエンスとしてのユーザー感性学における芸術体験論の起立とその実践構築化を目指したい。

欧米においてアートセラピー（art therapy）とは「視覚芸術」という一つの表現様式を用いた療法を指してきた。絵画や箱庭、コラージュや陶芸等の形として目に見える造形芸術分野を指し示し、ダンスや音楽あるいは文芸等の造形芸術以外である表現様式はその範疇に入れず、それらを含む場合は複数形においてアーツセラピー（arts therapy）と呼び、明確な区別を行ってきた。「アーツセラピー」という響きが日本人には馴染みにくいこともあり、日本では「アートセラピー」と「アーツセラピー」の区別は曖昧な状態となっている。本論文では本来の定義に基づき、主に視覚芸術を療法に用いる「art therapy」の意味において、アートセラピーという言葉を使用しながら論考を進めていく。ただし、第5章で詳述する「ソーシャル・アートセラピー」においては、「アート」の指す意味を狭義としての視覚芸術にのみに、その範疇を限定していない。

芸術作品の存在の態様などについて一般的、思弁的に考察する学問としての「芸術学」は、具体的な芸術作品の分析を通じて芸術の意味の解明をめざすが、この問いかけには本論文の目指す方向は当てはまらない。芸術作品ではなく、人間の心身に於て起きる芸術体験に焦点を当てた論考を通じて、芸術体験が人へともたらす機能とその解明をめざす新たな芸術体験論の構築を本論文においては試み、この問題へと迫りたいと考える。

人間が自己の内外の世界を響きあわせながら他者とコミットメントする心身の交歓体験は、医学的観点からも教育的観点からも大変重要なものである。仏教には依正不二という言葉があるが、互いに育くみあい、安らぎあう共有地（コモンズ）を地域社会や家庭、或いは学校等において他者と共に築き上げるラポールの形成能力は、コミュニティの崩壊が叫ばれ個々人の孤立化が進む社会の中において、現代人にとって生きるうえでの非常に切実なスキルとなっている。そうした共有地づくりへの大きな導線のひとつとして芸術という存在が非常に有効であることが、20世紀の初頭より精神科臨床に携る者たちによって気付かれ始めていった。‘ホモ・アルティフェクス（芸術家としての人間）’という言葉も生れる。そうした社会的動向の中、21世紀を跨ぎながら、医療は「治療の時代」から「養生（セルフケア）の時代」へ、art は「芸術」から「芸能」へと揺り戻しを見始め、世界が大きく移り変わろうとしていることを筆者は精神科臨床の現場を通しな

がら肌で感じさせられていった。

世界保健機関は、世界で少なくとも3億5千万人が鬱病の患者とみられるとの統計を2012年10月に発表した。精神医学者のメラニー・クライン (Melanie Klein) は「人間を害するほかのどんな病気より、鬱病から由来する苦しみのほうが大きい」と指摘したが、世界における毎年100万人近くの自殺者のうち、鬱病患者の占める割合はその半数を超えるとみられる。1998年以降、2011年まで毎年三万人以上の自殺者を生み続けてきた日本においても、こうした鬱病に代表される精神疾患の蔓延は大きな社会問題として取り上げられ、国をあげての対策が講じられている。

またこうした状況は、ストレスの多いとされる日本などの先進国に限られたことではなく、発展途上国においても鬱病の発生が目立つことが世界保健機関によって指摘され、全世界において共通する緊急課題となっている。「メランコリー」という名称で古代ギリシャ時代にその記述が認められるように鬱病の歴史は古い。人の精神衛生の向上への取組みは、人類が有史以来向き合ってきた深淵にある切実な課題であるともいえよう。

人は長い歴史の中で、心身の癒しをどのように模索し、どのような術を得てきたのであろうか。精神衛生の向上にむけた様々な治癒文化がその地域の歴史風土によって織り成されてきたが、その中において芸術という存在は、洋の東西を問わず古来より人の精神を癒す術であったことが知られている。ラスコー洞窟に代表される先史時代における洞窟壁画は、癒しの儀式へと深くつながっていたことが人類学研究によって明らかにされているが、芸術体験はあらゆる民族文化において生活の節々に取り入れられながら親しまれ、また畏れられてもきた。

遥か古来より存在し続けるこうした芸術体験のもたらす癒しの作用を、近代医学のテクノロジーとして精神科リハビリテーション治療へと応用していったもの、それがアートセラピー (芸術療法) なのである。古くて新しい人類の知恵として発達したアートセラピーという技法は、現在、精神医療や心理臨床、介護福祉や学校教育の現場において実践され、臨床研究が進められている。

現・日本芸術療法学会理事長の大森健一は、学会に集う臨床家・研究者たちに向かい「芸術療法は、芸術が治すのか、芸術で治すのか」と、その構造原理のあり方を繰返し問い続けている。大森は、アートセラピーは何を以て治療構造となすのか、芸術体験プロセスそのものが持つ力が患者を癒すのか、もしくは芸術を治療技法として用いることが治療的なのかを臨床の場において問い直すことの重要性を説いているのである。

20世紀に欧米において誕生したアートセラピーには、芸術体験を通じた自己治癒体験を起源とする流れと、サイコセラピーから派生した流れと二つの潮流がある。前者は芸術体験そのものが持つ癒しの力に論拠をおく‘art as therapy’の潮流であり、後者は手法として芸術を活用する心理療法を根拠に据える‘art psychotherapy’である。しかるにクレペリンによる二大精神病概念の提唱と、フロイトによる「無意識の発見」に始まった100年に渡る精神医学史を振り返ってみれば、学術界におけるアートセラピーの構造原理の先行研究とは、圧倒的に‘art psychotherapy’についての論及の積み重ねとなっている事実が判明する。そうした芸術療法論の反省から、アートセラピーの学術研究学会において昨今、‘art as therapy’をテーマとする研究の深化が必要であるとの認識が示唆され(伊集院,2009)、その挑戦が促されてきている。

こうした必然性を踏まえるかたちにおいて、人間の精神を癒しうる力を発揮する芸術治癒体験‘art as therapy’の発生が起こるメカニズムの解明をテーマに挙げていきたい。そのために本論では、芸術体験全体の共有過程を捉える概念として‘アートシェアリング’をキーワードとして掲げ、その構造原理に焦点を当てながら、これまで芸術療法論において研究が積み重ねられてきた‘art psychotherapy’の学術的知見の援用を以て究明に挑みたい。

Ⅱ. アートシェアリング

精神科医療にて用いられる「シェアリング」とは、力動指向的アートセラピーにおいて被験者が創作表現を行った後にその感想を述べあうなど、言語的なコミュニケーションを交えながら作品に表した思いを対象者（セラピスト／鑑賞者）へと伝え、共にそのイメージを分かち合う過程を指す呼称である。

そうしたアートセラピーにおける作品鑑賞の一過程を示す「シェアリング」という呼称に対し、本論では広義の意味において芸術体験全体の共有過程を「アートシェアリング」と規定し、対象化していきたい。

本論では芸術体験によって立ち現れる人間交流としてのアートシェアリングに着目し、そこで展開される精神力動の解析を通して、芸術体験において「癒し」が発生し、「art as therapy」が起立するメカニズムとその構造因子の解明に取り組む。ここで構造因子とは表現者と芸術体験を分かちあう両者の関係性を指す。本論文では、その両者の関係性によって、アートシェアリングに内在する「therapy」発生効果の差異を明らかにすることを目的とする。

人間同士のコミュニケーションにおいて要求される重要なことの一つに、向い合う相手と気持ちを通じあわせる感性の交歓が挙げられる。そこでは、文字や会話といった言語と同様に、表情、抑揚、身振り手振りなど言葉以外の手段によって、感情、動機、意図、嗜好など、感性を知る手がかりが伝えられる。相手の喜怒哀楽や話を理解しているのか等、感性コミュニケーションを通しながら互いの気持ちを感じあって初めて人間はストレスなく円滑に交流をはかることが可能となる。しかし向い合った相手との情報の共有は比較的簡単にできても、感情の共有は難しい。美術評論家の建畠哲は「相手を理解するべき努力は最大限するべきだが、限界もある。そうした限界を超えて、共感や驚きを抱けるのが芸術の力ではないか」と述べる。

互いに相手の感情を共有する感性交歓の場づくりにおけるひとつの有効な手立てとして、アートシェアリングは社会の様々な場面において広く活用されてきた。それは芸能という領域において特に顕著であり、くにつくりから年中行事まで、古来より洋の東西を超えたかたちで人が他者、或は世界との関係性を深め結わえ直す儀礼の場において、広く人々の間でアートシェアリングは重宝されてきたという歴史を永く持つ。

発達心理学には「joint attention（共同注視）」という概念がある。「joint attention」の出現は、「幼児が他者の意図や心理状態を読み始める、発達上の一大ターニングポイントとされる。これを機に、母子は二者の外にある対象を共有し、考え、言葉をかかわすようになっていく」と精神分析家の北山修は述べ、この「joint attention」という先行概念をもとに「共視」という語を造った。「母子関係が媒介物を橋渡しにして開かれていく」という認識を人間の感性コミュニケーションの出発点においてみると、「共に眺める」という行為が情緒的・身体的な交流でも非常に重要な意味を持っていることに考えが及ぶ。特に日本人は二者間「内」の情緒的交流と二者間「外」の言語的交流の二重性を維持することを特質とすることが指摘されている。

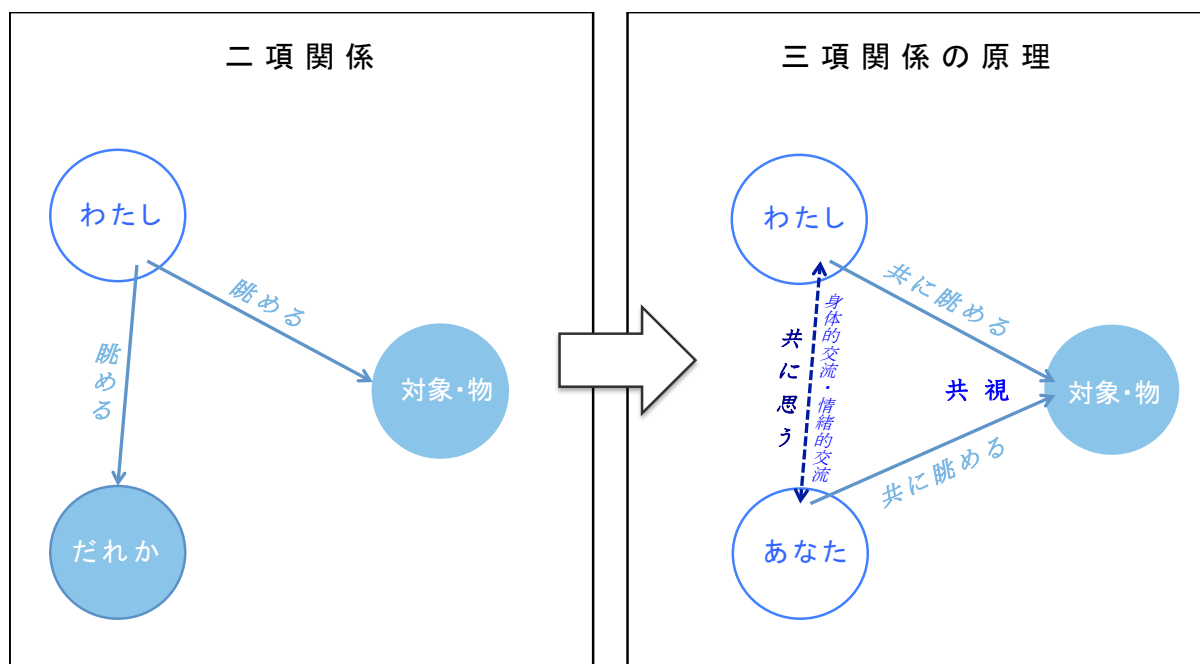


図. 二項関係との比較における三項関係の原理

※ 北山の「二者間内交流と二者間外交流」図（北山修,2005）に石田が加筆・作成

共に芸術作品を眺める三項関係を通して二者間内に感性コミュニケーションを成立させるアートシェアリングは、社会形成が織りなされる折々に、人と人との交流を促す手法として用いられてきた。こうした三項関係を原理のひとつに置くアートシェアリングでは、芸術体験の場を共同注視する相手側との関係性の如何によっては、癒しの力を発揮するどころか、傷つき体験を発生する場合も少なくない。誰と芸術体験を共にするのかという人間関係性が、そこに起立し場の質を大きく左右する。

本論では、芸術体験において‘therapy’を起立しうる対人関係性の差異に着目し、各ケース毎において起立するアートシェアリングの構造モデルの比較分析を通して、‘art as therapy’の発生を促す感性コミュニケーションの構造原理の解明を、アクションリサーチを交えながら試みていきたい。

Ⅲ. 本論の流れ

本論では、アートシェアリングの構造を分析することを通じて、なぜ芸術体験において‘therapy’が発生しえるのか、その原理を究明し、アートシェアリングの示すこれからの可能性を論考するため、次のような流れで論述を進めたい。

第1章では、まず‘art as therapy’を巡る芸術人類学と精神医学史の先行研究を手繰ることを通して、これまでに人類がいかに芸術体験を自らの精神衛生の向上の術として実践し検証してきたのかを俯瞰してみたい。芸術がいつ誕生し、そしてアートセラピーはどのように発明され、どのような発達を辿っていったのか、イギリス、アメリカ、日本におけるパイオニアたちの軌跡と臨床実践の歴史を、先行研究を通して概観する。次に芸術学へのアートセラピーの接続を試み、‘art as therapy’の芸術学における学術的検証を試みたい。ここでは比較美学を挙げながら、

言分け理論を通して、治療者側の視座にある芸術療法論を翻すことを試み、アートセラピー‘被験者’の主體的体験として‘art as therapy’を発生させる芸術体験を論じる。精神医学と芸術学、双方の‘art as therapy’を巡る先行研究において顕在化する学術的課題を模索し、芸術作品ではなく芸術体験の分析に視座を据える新たな芸術体験論の必然性を示す。

第2章では、人が芸術体験を行なえばいかなる状況下においてもセラピューティック（治療的）な効果を発起するものではないことを示す事例としてアートコンプレックスの発症を挙げ、その構造原理を分析する。芸術体験において、その精神的治癒効果を分ける差異がどこに起因するのか、対象関係論を援用し、様々な芸術体験場面における構造モデルを通じた比較分析を試みる。

第3章では、精神科医療におけるアートセラピーの事例「被害妄想を持つ統合失調症患者におけるアートシェアリングを通じた居場所創り」を取上げて、精神科リハビリテーション治療における‘art psychotherapy’を通じた‘art as therapy’の実際を考察し、その構造を探求する。

第4章では、「アート鑑賞ワークショップ ギャラリーコンパ」「みみをすます絵本ワークショップ」「親子で廃材木琴づくりワークショップ」という筆者がファシリテーターとして携わる3つのアートワークショップ・プログラムを事例として挙げながら、アートシェアリングを意図する芸術体験ワークショップの実際を分析し、2人称芸術体験において如何に‘art as therapy’が起立するのか、その構造原理の考察を行なう。

第5章では、‘art as therapy’を発生させるアートシェアリングの構造原理が、新たな今日の課題をさし示す可能性を模索する。一人一人が‘個人の抱く深いイメージ’へと立脚しながらも、同時に‘他者との共感を深める’という特性を持つアートシェアリングを新たな地域創造の術として活用するコミュニティアート・プロジェクトに着目した。コミュニティアート活動を通じた地域社会におけるアートシェアリングの広がりや深まりが、市民の精神衛生の向上へ向けて有効となるという仮説のもと、5年間に及んだ活動をアクションリサーチによって検証する。

最終章となる第6章では、本論文の総括として、アートシェアリングがさし示す新しい地域創造の可能性を展望していく。

全体の構成としては、「アートでリハビリテーション」を行なうことに焦点を当てた第1章・第3章・第4章と、「アート自身のリハビリテーション」を行なうことに焦点を当てた第2章・第5章、それらを総括する第6章というテーマの組み合わせ内容をとっている。

本論文においては、6つの章を通して、芸術体験が持つ癒しの力‘art as therapy’が発生しうる感性コミュニケーションの構造原理を解き明かし、人間が生み出し様々に活用してきた文化的営為としてのアートシェアリングの持つ、新たな可能性を示したいと考える。

第1章 ‘art as therapy’ を巡るパイオニアの先行研究

第1章では、‘art as therapy’ を巡るパイオニアの先行研究を手繰り、これまで人類がいかに芸術体験を自らの精神衛生の向上の術として実践し検証してきたのかを俯瞰し、精神医学と芸術学、双方のアートセラピーを巡る学術的課題を模索した。

その結果、これまでのアートセラピーを巡る学術研究は、精神医学や臨床心理学の領域における‘art psychotherapy’についての議論であり、これからの目指すべき課題として、‘art as therapy’の芸術療法論における解明が必要であることを明らかにした。

表. 芸術養生（セルフ・アートセラピー）と芸術療法（アートセラピー）の比較

※ 神田橋による「養生と治療」の表に石田が加筆・作成

		養生	治療
担当者		本人	専門家
方法		個人にあわせて試行錯誤	確立された技術と訓練
効果の発現		ゆっくり、曖昧い	速やかさ
副作用・危険		ない・少ない	ある
期間		長期・生涯	短期が理想
作用の本質		自然治癒力の増進＝根本的	自然治癒力の活用＝一時的
		芸術養生	芸術療法
‘art as therapy’	場面	くらし、日常	医療、介護、カウンセリングの現場
	意図 意識	意図せず自然発生的に起こる ‘therapy’の意識は持たない	意図的に自律性の活性化を促される ‘therapy’の意識を持つ

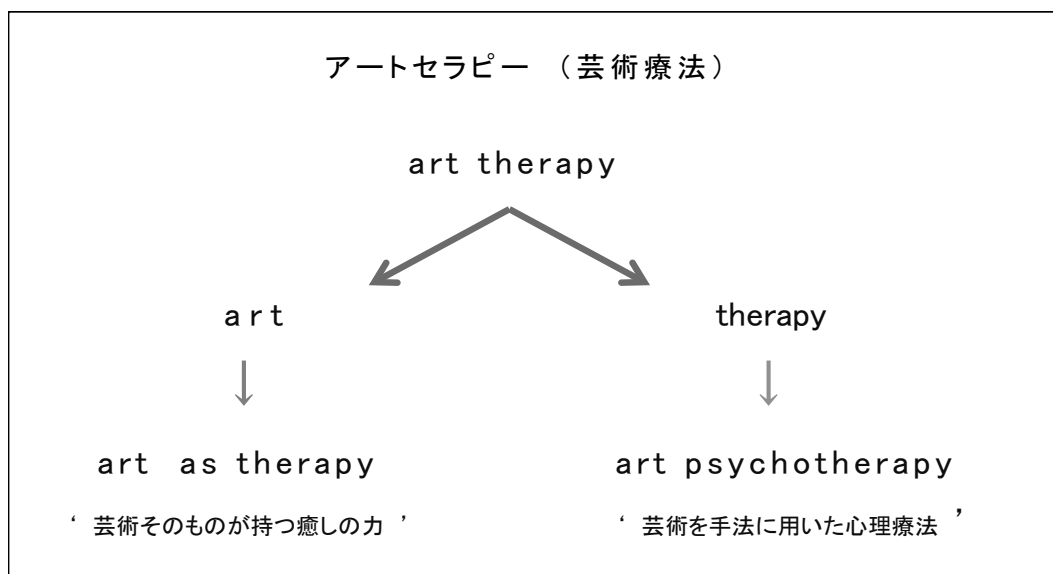


図. アートセラピーの二つの起源

第2章 芸術体験におけるアートシェアリングの言分け構造

第2章では、人が芸術体験を行なえばいかなる状況下においても癒しの効果を発起するものではないことを指し示す事例としてアートコンプレックスの発症を挙げ、芸術体験においてその精神的治癒効果を分ける差異がどこに起因するのか、対象関係論を援用し様々な芸術体験場面における構造モデルを通じた比較分析を行い、‘art as therapy’の起動する芸術体験構造を探った。

結果として、‘art as therapy’の起動する1人称芸術体験へと移行展開を促す2人称芸術体験の構造原理が明らかになった一方で、被験者に客観的作品評価姿勢をとることはアートコンプレックス発生を誘発する起因を構造的に備えた3人称芸術体験をもたらし、2人称芸術体験と心理的効果の違いを生み出すことが明らかにした。

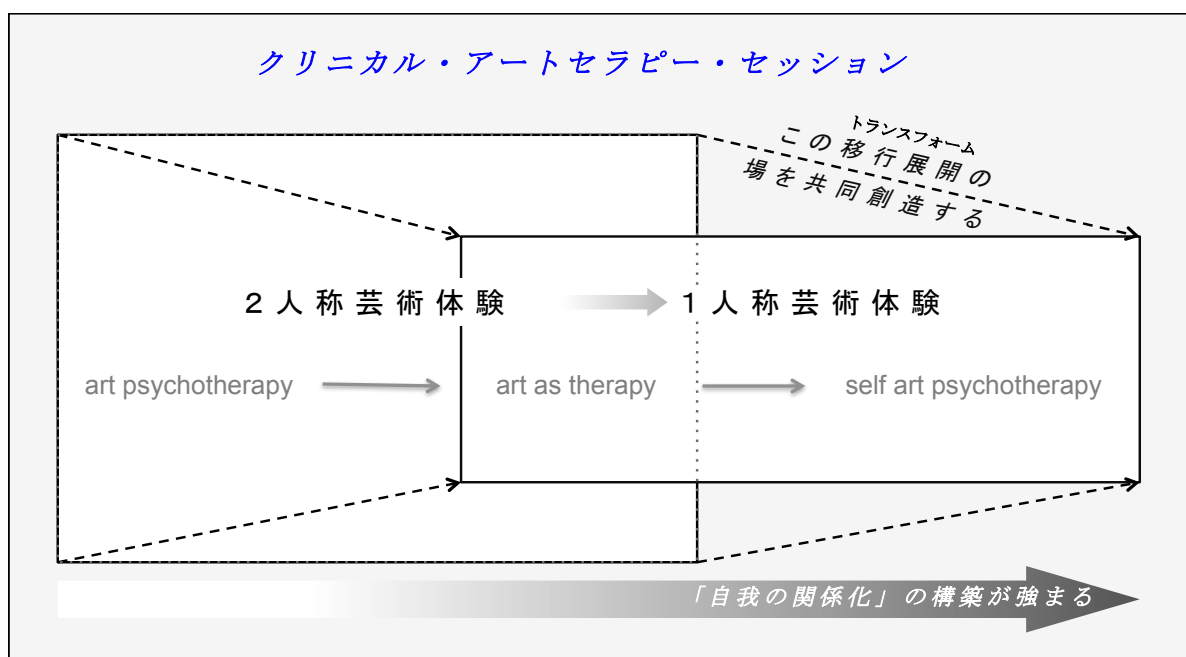


図. 芸術療法における治療体験構造の移行展開

表. 芸術体験における人称性関係モデルの比較分析

カテゴリー	文化構造	関係構造	治療構造
1人称芸術体験	<p>アートレクリエーション指向 例) 筆を走らす私⇔見測る私、心⇔体、外的現実⇔内的現実 内容: 自分自身と共にいる能力「自我の関係化(Ego-Relatedness)」を礎に、心体の同一性を浸透させ、自律性の息づく内的現実を拡充させゆく芸術体験</p>	<p>セルフ・アートシェアリング 表現者: 私 鑑賞者: 私 作品: 「私」の領域世界に表される場の観察者: なし 評価姿勢: 客観的作品評価は存在しない 領域: 「私-作品-私」の三項関係において「私」と「自身」との間に中間領域が起立</p>	<p>芸術養生 (Self Art Therapy) 被験者: 私 治療者: 私 行為の贈与対象: 私自身への贈与体験 治療構造: 「個になる能力」を育むくらしの中の楽しみとしての芸術活動により起立するself art psychotherapyにてart as therapyの発生が促される</p>
2人称芸術体験	<p>アートセラピー指向 例) 母⇔子、セラピスト⇔被験者 内容: 1人称芸術体験への移行を促すための過渡的な体験プロセス。表現者が寄り添う相手との間に創出する中間領域において「自我の関係化」を培い自律性を呼び覚ます「療法芸術」体験</p>	<p>対称性アートシェアリング 表現者: 私 鑑賞者: 私とあなた 作品: 「共」の領域世界に表される場の観察者: セラピスト (あなた) 評価姿勢: 客観的作品評価を存在させない 領域: 「私-作品-あなた」の三項関係において私とあなたとの間に中間領域が起立</p>	<p>臨床芸術療法 (Clinical Art Therapy) 被験者: 私 治療者: あなた 行為の贈与対象: 私への贈与体験 治療構造: 芸術体験を介して場に抱擁(holding)され、芸術養生の発生をもたらす。art as therapyの発生を促す場が起立し「本当の自己」の促進を伴う</p>
2.5人称芸術体験	<p>アートワークショップ指向 例) ファシリテーター⇔参加者 内容: 一座建立を図りながら、同時に個としていられる力(自我の関係化)を培い、他律性と自律性が各々混交する共創活動を通して「集団知」と「臨床の知」を学びあい教えあう芸術体験</p>	<p>汎アートシェアリング 表現者: 私達 鑑賞者: 私達 作品: 「公-共」の領域世界に表される場の観察者: ファシリテーター (あなた) 評価姿勢: 客観的作品評価を意識させない 領域: 「私-絵-あなた達」の三項関係において私とあなた達との間に中間領域が起立</p>	<p>汎芸術療法 (Pan Art Therapy) 被験者: 私たち 治療者: あなたたち 行為の贈与対象: 私たちへの贈与体験 治療構造: 臨床芸術療法との境界線にあたる芸術活動。不特定の参加者による一期一会のart workshopにおいて art as therapy が発生する可能性を孕む</p>
3人称芸術体験	<p>アートレッスン指向 例) 先生⇔生徒 採点者⇔受講者 内容: 個人的関係の及ばない形での客観的評価を作品に下す権威的鑑賞者と表現者との三項関係。他律性が息づく環境で表現者が自律性を育む芸術体験</p>	<p>非対称性アートシェアリング 表現者: 私 鑑賞者: 客観的評価を下す他者 作品: 「公」の領域世界に表される場の観察者: 彼(彼女) or なし 評価姿勢: 客観的作品評価を存在させる 領域: 「私-作品-他者」の三項関係において、表現者には中間領域が起立しえない</p>	<p>非芸術療法 (Non Art Therapy) 被験者・治療者: なし 行為の贈与対象: 権威者からの採点体験 治療構造: art lessonにおける客観的評価態度は、表現者に自己同一性の解体とart complex 発生を誘発を及す</p>
不定称芸術体験	<p>アートワーク指向 例) 芸術家⇔不特定の鑑賞者、批評家 表現者個人⇔社会 (他者達) 内容: 社会へと公開を行う芸術家活動社会と私との間に創出する中間領域において表されゆく芸術体験。自律性の中に他律性をせめぎ合わせる芸術体験</p>	<p>ソーシャル・アートシェアリング 表現者: 私 鑑賞者: 客観評価を表す社会 作品: 「公-私」の領域世界に表される場の観察者: 私 評価姿勢: 作家は作品評価の場を開拓する 領域: 「私-作品-社会」の三項関係において「私/社会」との間に中間領域が起立</p>	<p>辺縁芸術療法 (Marginal Art Therapy) 被験者: 私 治療者: 私 行為の贈与対象: 社会への贈与体験 治療構造: くらしの中での芸術創作の喜び、社会生活との境界線にあたる芸術療法としてart as therapyの発生を通じた「本当の自己」の促進を伴う</p>

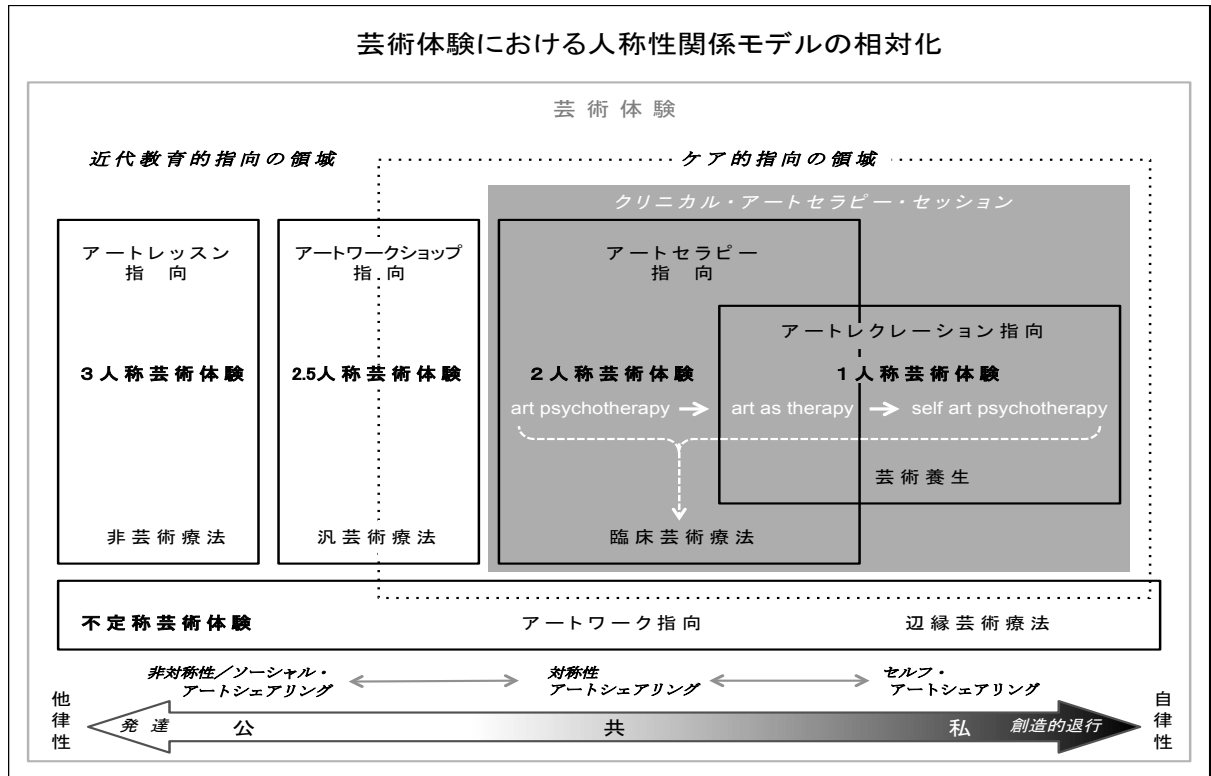


図. 芸術体験における人称性関係モデルのマトリックス

第3章 精神科臨床におけるアートセラピー事例を通じたアートシェアリングの考察

第3章では、精神科リハビリテーション治療における‘art psychotherapy’を通じた ‘art as therapy’ の実際を考察し、その構造を探求した。

その結果、精神科リハビリテーション治療における ‘art psychotherapy’ とは、患者自身がセルフ・アートシェアリングの体験を重ねることで ‘art as therapy’ を受け取るという芸術養生の仕組みを精神科治療として構造化した臨床技法であること、そして絵画療法セッションの構造は通過儀礼の構造原理と重なっており、どちらも体験者が自律性を揺り戻しながら、自己と世界との関係を深く結わえ直すリハビリテーション機能を発揮させることを明らかにした。

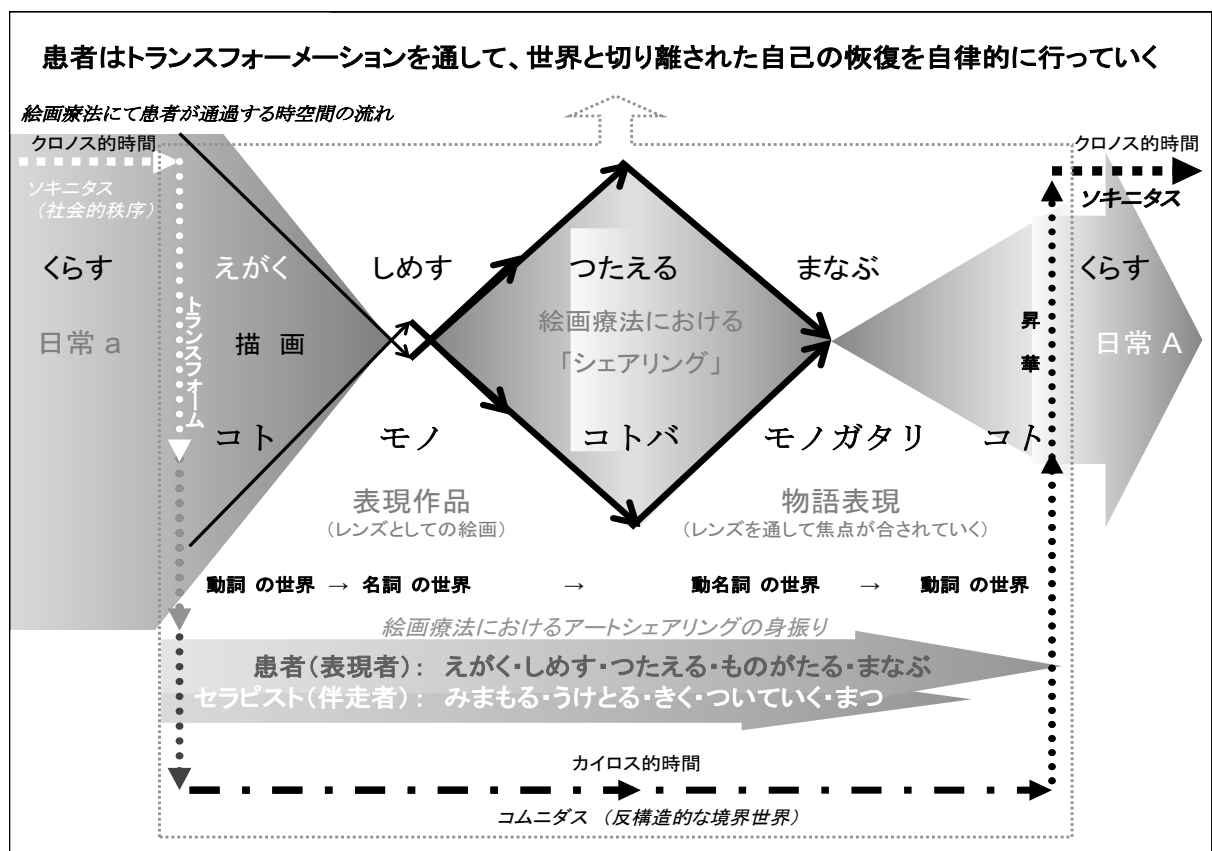


図. 精神科リハビリテーション治療における絵画療法セッションの通過儀礼的構造

第4章 2人称芸術体験を礎とするワークショップ事例を通したアートシェアリングの考察

第4章では、3つのワークショッププログラムを事例として挙げながら、アートシェアリングを意図する芸術体験ワークショップの実際を観察し、芸術体験において如何に‘art as therapy’が起立するのか、その構造の分析を行なった。

その結果、母子という関係性を規範として構築化される2人称芸術体験の持つ対称性アートシェアリングの構造が、作品やテキストといった客観的事物を介したイメージの分かちあいを通して、互いの自律性を促進させながら双方のあいだに成立する間主観性を共創し、それを共有する過程を通して、セラピューティックな場を起立させる構造原理が明らかになり、ここではそれを「対称性アートシェアリングの原理」と称した。

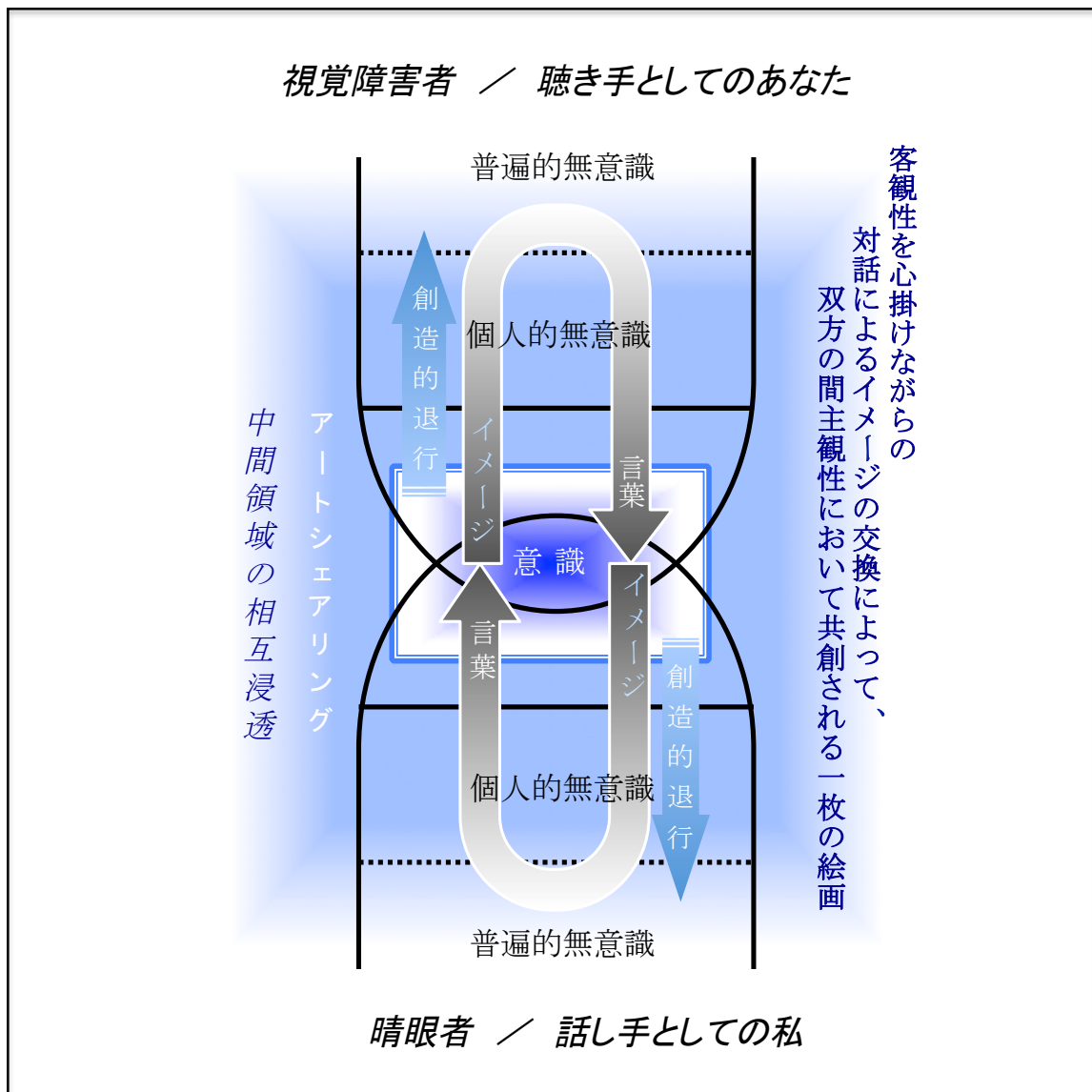


図. ギャラリーコンパにおけるアートシェアリングの心の対称性構造

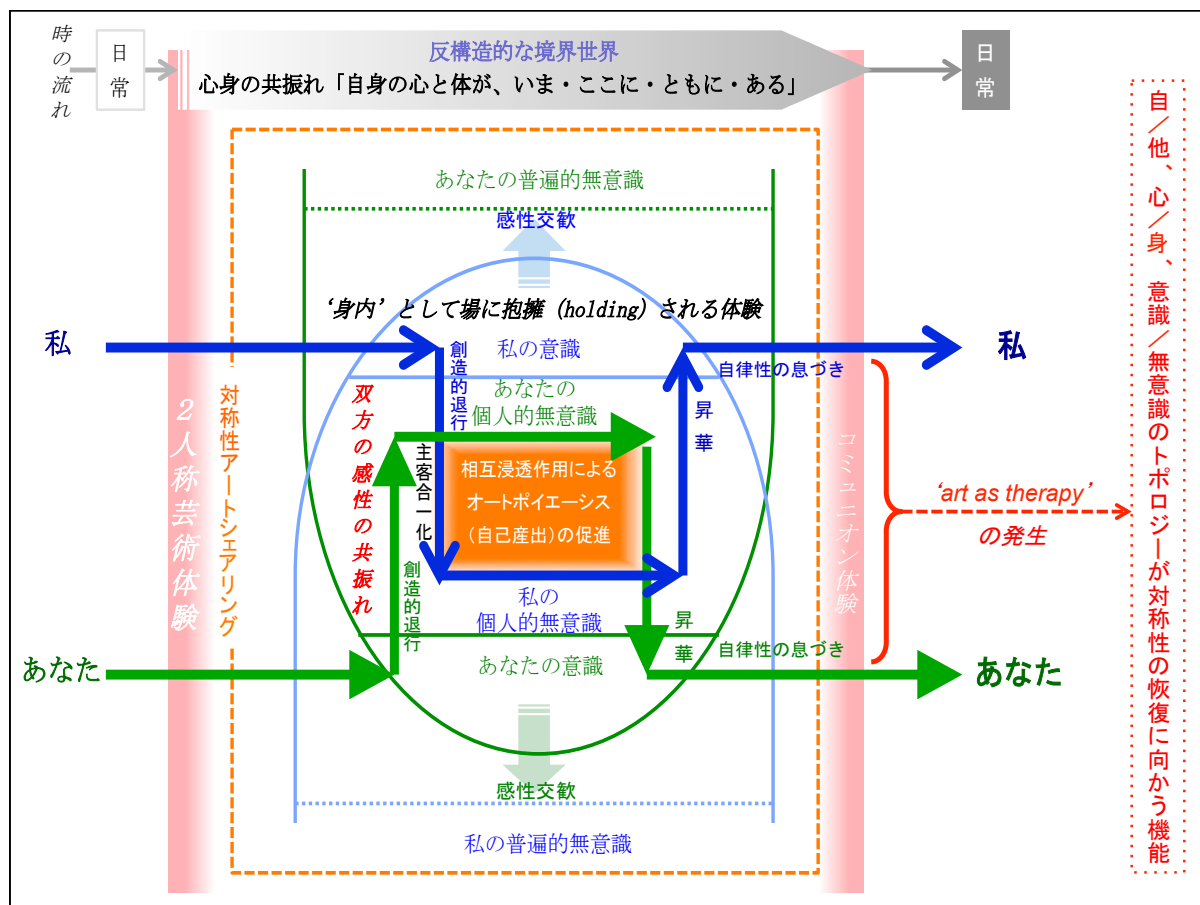


図. アートシェアリングにおける共振れを通じた 'art as therapy' 発生の構造

2人称芸術体験を通して、'私'と'あなた'の創造的退行が促され、互いに感性交歓を行いながら対称性アートシェアリングを以て主客合一化をはかる。そこでは、日常世界とは異なる反構造的な境界世界へと移行しながら自身の心と体が'いま・ここに・ともに・ある'心身の共振れが起こっていく。'私'と'あなた'は相互浸透作用による'身内'として場に抱擁 (holding) される体験をもって、双方が身籠り身籠られながら自身のオートポイエーシス (自己産出) の促進がケアイングとも呼べる相互互助によって行われ、昇華がなされる。この自律性の息づきに満ちたコミュニオン体験は、自/他、心/身、意識/無意識のトポロジーの歪みを矯正する、均整のとれた対称性世界への回復に向かう治癒機能をもたらしていく。

こうした 'art as therapy' を発生させるアートシェアリングの構造の比較において、他の人称関係性モデルにおけるアートシェアリングの原理のパターンは、下記図のようなかたちとなって相対化される。「対称性アートシェアリングの原理」とセラピューティック機能を比べた場合、アートコンプレックス発症の危険性を伴う3人称芸術体験が起立させる非対称性アートシェアリングは、'art as therapy' を発生させず、むしろアートコンプレックスの発生を誘発する心理的危険性を孕むものとして「非対称性アートシェアリングの原理」と呼ぶことにする。

芸術体験における'私'の精神力動性の移行の流れは、向い合う相手によって、アートシェアリングの対称性・非対称性を左右し、意識下における自律的システムに大きな影響を与えることとなる。

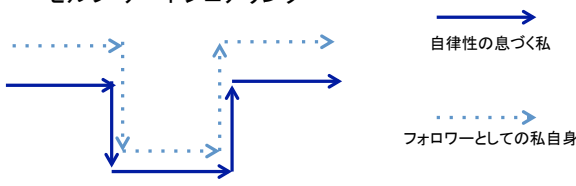
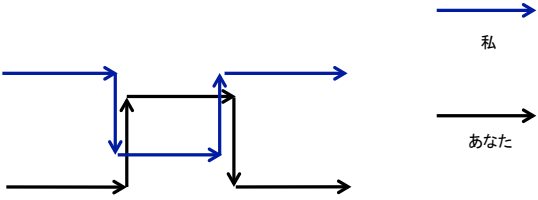
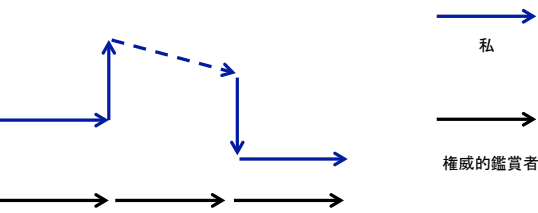
人称性関係構造	アートシェアリングにおける通過儀礼的構造のパターンモデル	セラピューティック機能
1人称芸術体験	<p>セルフ・アートシェアリング</p>  <p>自律性の息づく私</p> <p>フォローとしての私自身</p> <p>‘私’と‘私自身’との共振れ的一致</p>	<p>‘art as therapy’ が発生</p>
2人称芸術体験	<p>対称性アートシェアリング</p>  <p>私</p> <p>あなた</p> <p>‘私’と‘あなた’との共振れの相互浸透</p>	<p>アートコンプレックスは発生しない</p>
3人称芸術体験	<p>非対称性アートシェアリング</p>  <p>私</p> <p>権威的鑑賞者</p> <p>権威的鑑賞者のもたらす心理的抑圧によって、いびつに振れる‘私’</p>	<p>‘art as therapy’ は発生しない</p> <p>アートコンプレックスの発生を誘発する</p>

図. アートシェアリング各パターンモデル比較における ‘art as therapy’ 発生 の原理

※ 「2.5 人称芸術体験」「不定称芸術体験」は、向い合う相手の精神力動性の如何によって左右され、その関係性によって上記の3パターン の何れかにその時々で収斂される。

第5章 地域創造に向けたソーシャル・アートセラピーのアクションリサーチ

第5章では、九州大学のある箱崎地区で筆者自身の行った5年間のアクションリサーチにおいて、「対称性アートシェアリングの原理」をセラピューティックな地域創造の術として活用できないか、新たなコミュニティアートのアプローチを試行した事例を分析した。

そこでは、他者との関わりで育まれるもの「learning2.0」であるアートシェアリングが、さらに特定の対象に向けた情熱によって深められる劇場型の学び「learning3.0」のコミュニティアートへと発展する新たな社会教育活動が、ソーシャル・アートセラピーの活動として位置づけられる事が明らかになった。

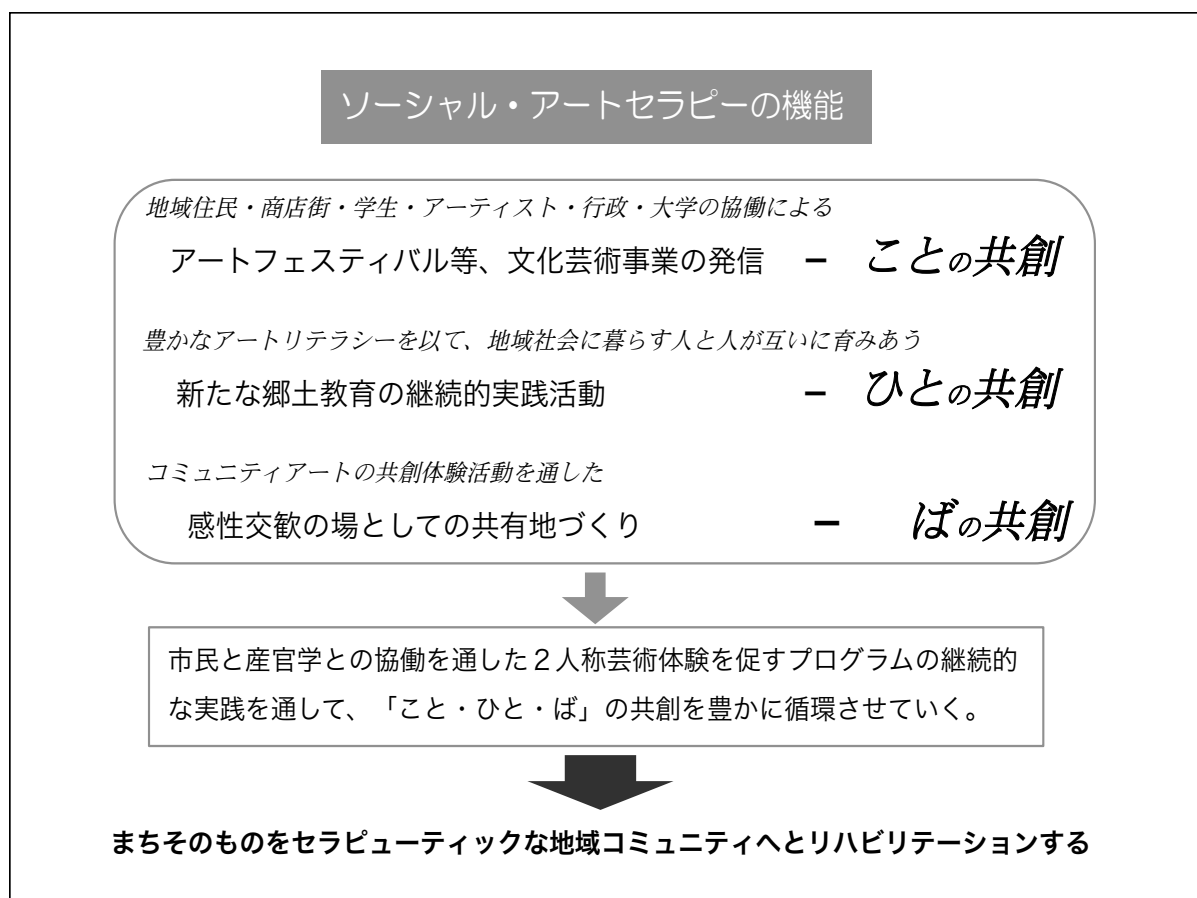


図. 地域創造に向けたソーシャル・アートセラピーの取組みとその機能

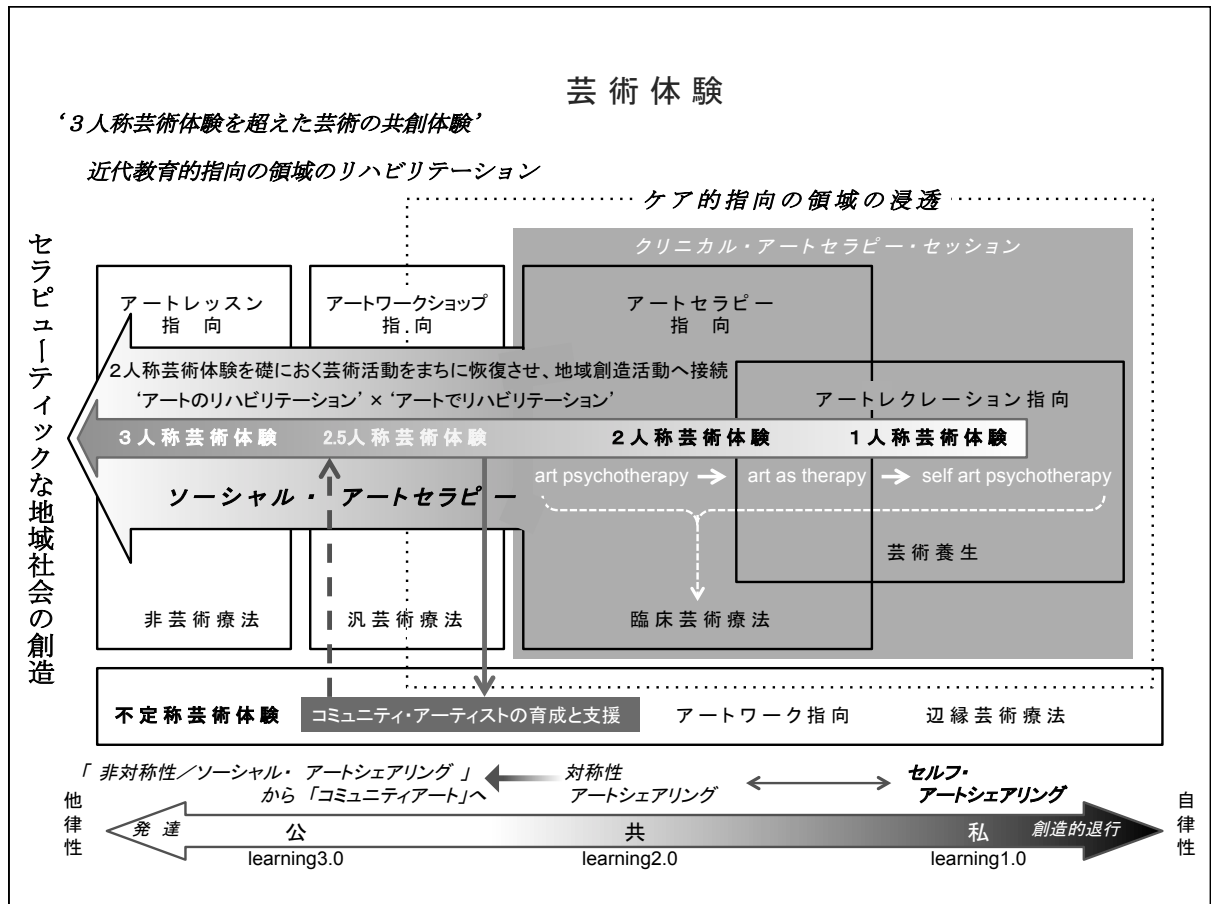


図. 芸術体験における人称性関係モデルにみるソーシャル・アートセラピーの構造

第6章 アートシェアリングのさし示すもの

最終章となる第6章では、本論文の総括として‘art as therapy’を発生させる対称性アートシェアリングの構造原理がさし示す、今日における芸術体験の可能性を明らかにしていきたい。

I. アートシェアリングからコミュニティアートへ

第5章においては、まちに暮らす市民の「育む×育まれる＝育みあう」「ケアする×ケアされる＝ケアしあう」「表現する×鑑賞する＝共創する」といった豊かな2人称の関係性の発展を促すものとしてのコミュニティアート活動の展開を通し、その活動の継続性をもって市民のセルフケアを育みサポートする環境としてのまちづくりを実現することへの可能性を、アクションリサーチを以て探ったが、その礎としたのが、対称性アートシェアリングの原理であった。

2人称芸術体験は、‘私’と‘あなた’双方の中間領域へ相互浸透をもたらし、主客合一を促しながらイメージの共創体験を促す。そうして双方に共有された中間領域においては、他者を他者のまま受容し、‘私’と他者との関係性を止揚して対称性を取り戻す治癒効果を発揮する。

自然なかたちでこうした感性コミュニケーションの交流を促す対称性アートシェアリングは、自己創造と他者との共有地創造（環境創造）とを密接にシンクロさせながら産出させる機能を構造化している。

この2人称芸術体験における対称性世界のクリエイティビティ効果は、これからの地域コミュニティの創造活動へと広く応用することのできる可能性を湛えている。

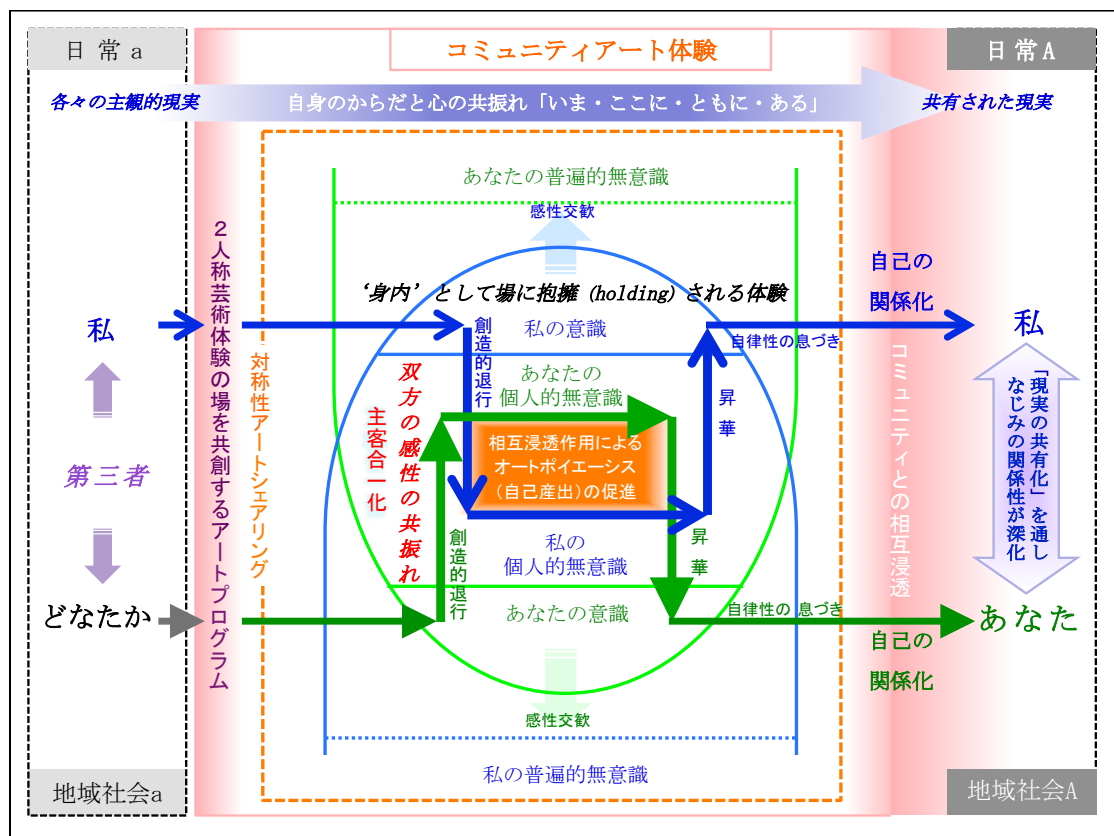


図. 2人称芸術体験を礎としたコミュニティアートの構造

II. 芸術体験がもたらしうるもの

下記の図に表したように、「三項関係の原理」「対称性の原理」「自我の再適応装置の原理」「通過儀礼の原理」「贈与の原理」といった様々な次元における諸原理を孕む芸術体験は、「対称性アートシェアリングの原理」を介しながら、セラピューティックな機能を、本来は人へともたらしうるものであった。

しかし、その場合における‘芸術体験’とは、対称性アートシェアリングの原理が息づく近代教育学を迎える以前の芸術や民俗芸能と呼ばれる領域世界、鶴見の語る限界芸術のことであり、近代以降において美術教育実践を通じた3人称芸術体験の席卷は、それらの本来内包する原理の束を‘芸術体験’の中から解き、一部の芸術愛好家を除いた多くの人々の暮らしの中で‘art as therapy’の力を自壊させた。

翻せば、2人称芸術体験を礎としたコミュニティアートプログラムを通して、‘芸術体験’が人にもたらしうる力を回復するための「アートのリハビリテーション」を、既存の芸術学を一人一人が自身の手によって暮らしの中で治療する場づくりが、今後の地域における基層文化の再生に向けた文化コミュニティにおいては重要な鍵となると考えられる。そうした地域創造に向けての、まちへの‘art as therapy’の処方箋を、筆者は「ソーシャル・アートセラピー」と名付け、アクションリサーチという形で取組んでいった。

デザインが「解」への希求であるとするならば、芸術は「問い」への希求である。コミュニティデザインと違い、コミュニティアートは、そのコミュニティにおいて自らが問いを見出し、それを解ではなく、問いかけのまま贈りあう場づくりを指向する。セルフケアとセルフ・エデュケーションは、コミュニティアートにおいて等しく繋がる。

アートシェアリングは、‘私’と‘あなた’との共創体験を通して、双方の内部生命の相互浸透を起こしていく営みである。自己と他者とを分け隔てる様々な障害を溶かし、双方に拓かれた共有地である汽水域をつくりえる存在として対称性アートシェアリングを捉えながら、ケアに根ざしたセラピューティックな地域文化創造への可能性を2人称芸術体験は湛えている。

文化的営為と医療行為をスパイラルに循環させるアートシェアリングの年輪の中心には、表現者の主体的体験としての芸術体験がある。人間のLife（暮らし・人生・生命）におけるCulturalとClinicalを一對のものとして相互浸透を引き起こす機能効果を芸術体験は内包している（下記図）。

芸術体験は、自身の心とからだの共振れ、そして‘私’と‘あなた’の相互浸透、その双方を結びあわせ自己産出を促させるセラピューティックな共有地を、対称性アートシェアリングの原理において人へともたらしうるものである。

本論文では、その事を「アートシェアリング」というキーワードを用いた検証を通して明らかにし得た。

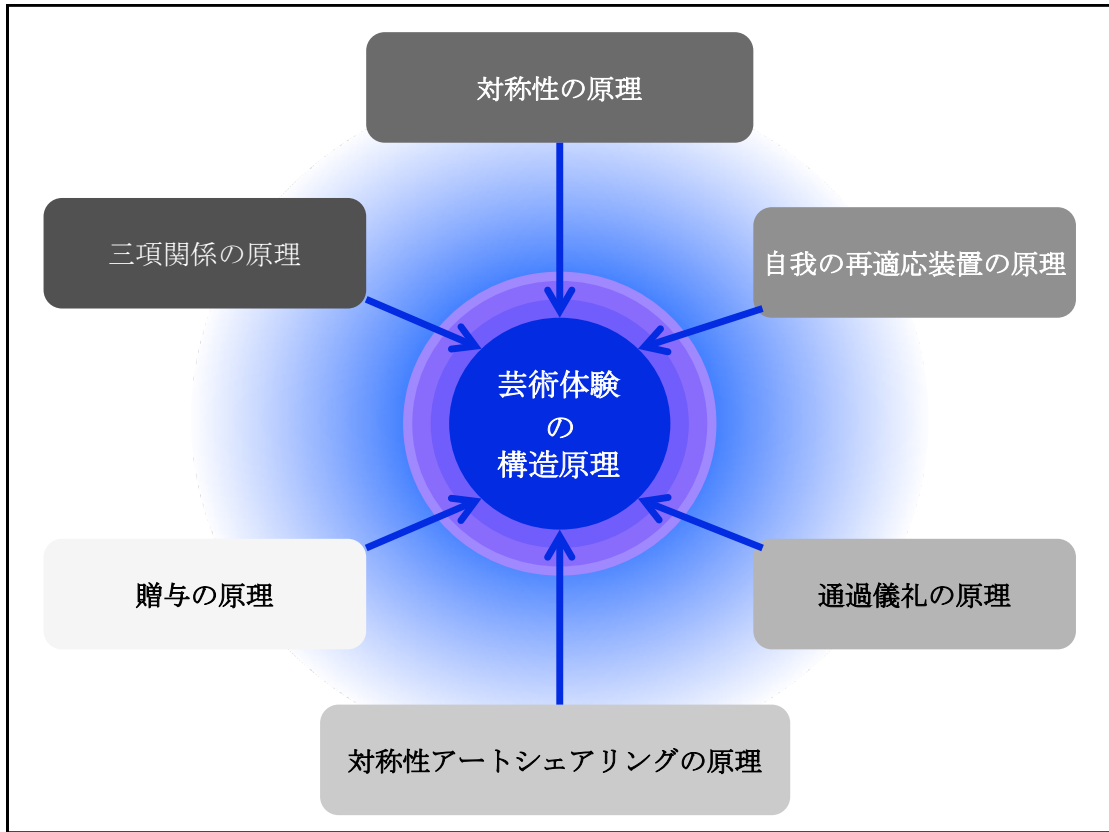


図. 様々な原理を幾重にも重ね持つ芸術体験の複論理性

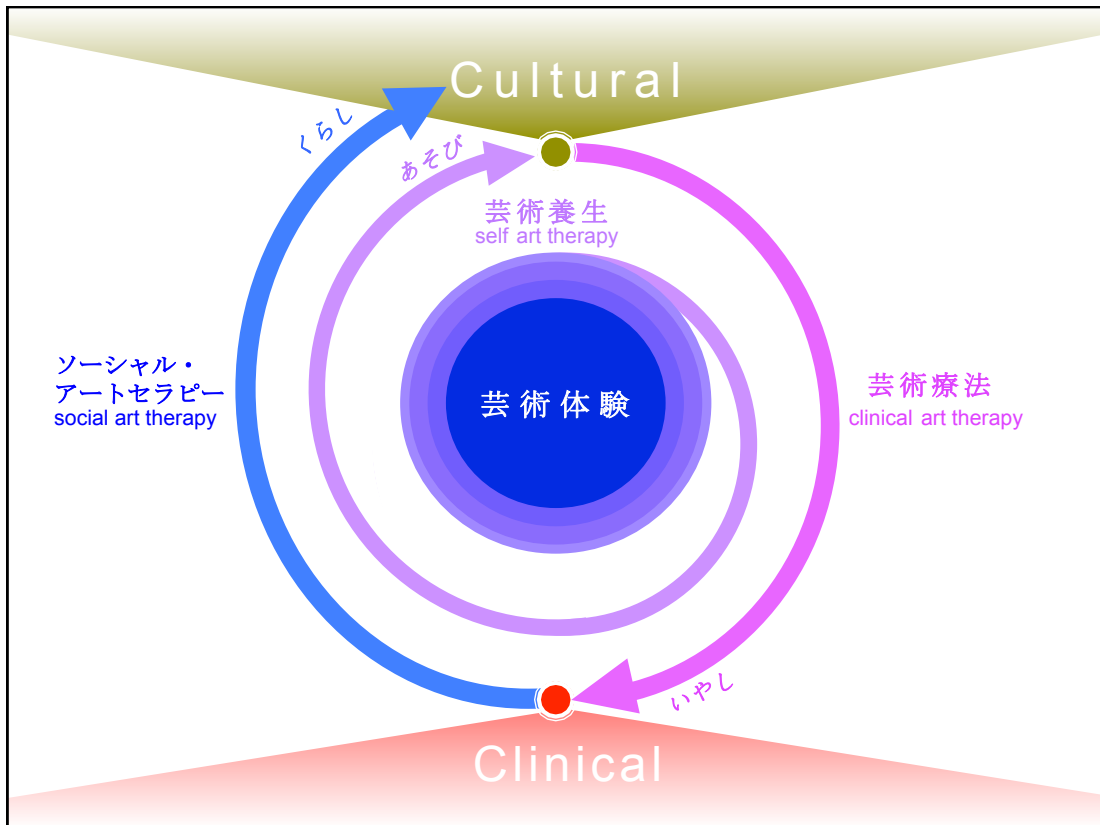


図. 文化的営為と医療を相互浸透させゆくアートシェアリングのスパイラルな発達構造

Ⅲ. 今後の課題

医療の最も重要な役割のひとつに早期の予防医療があるが、精神医療においてもそれはやはり見過ごす事の許されぬ重要なテーマである。多くの精神科病院においても地域の中学・高校におけるカウンセリング等、院外活動における積極的な予防医療の取り組みが現在なされている。しかし病院にアートセラピストとして勤務する立場より社会状況を見てみると、より多くの地域住民の為にはアートセラピーを予防医療として何らかの形で一般に提供することが、今後必要とされているのではないかと感じさせられていく機会が増えた。

また第5章において述べたように、そうした経験をもとに5年間に渡るアクションリサーチとして「箱崎千年会議」や「箱崎アートターミナル」等の開催といったソーシャル・アートセラピー活動をまちで展開してみると、実際にその必要性を強く痛感させられていく機会が多かった。

アクションリサーチを展開する対象とした箱崎のまちは、百年以上に渡ってまちのシンボルであった九州大学箱崎キャンパスの移転にともない、まちの斜陽化が懸念されている状況にあった。しかしそれを千年のスパンにおいて翻してみると‘脱アカデミズム’つまりは‘脱近代’の新たな学び場への再生事業として、地域社会に拓かれた新天地となる可能性を箱崎は湛えているとも、捉え直すことができる。

元々、アートセラピーは欧州において教育と医学、その二つの潮流を以て発展した経緯を持つ。美術評論家であるハーバード・リード (Sir Herbert Read) の「芸術は教育の基礎たるものである」という主張や、アートセラピーに置ける自発性といった概念は、欧州諸国における1940年代以降の美術教育の方向性へと多大なる影響を及ぼし続けた。オーストリアの医師オリゲン・コスリコ (Eugen Corisco) は「教育とは、予防医学の役割を果すものだ」と述べている。第3章において検証したように学びとケアが相克しあうかのような現在の社会状況や教育現場を見つめると、モリスによるアーツ・アンド・クラフト運動や、宮沢が岩手県花巻市において展開を試みた「農民芸術概論」の実践に連なる、市民の相互自助作用を促進させ、学びとケアとを相乗させる「‘educational’ art therapy × ‘medical’ art therapy = ‘social’ art therapy」の展開に向けた実践構築化を目指し、芸術教育学と芸術療法論との学際的研究領域における新たな芸術体験論において探求することを、今後の展望として考えたい。

また、本論文においては、アクションリサーチを展開し考察を行う中で客観指標ではなく主観指標でもない、間主観性指標に方法論に置く研究方法に気付かされていくこととなった。今後アクションリサーチを継続し展開するにあたっての課題として、様々なまちの関係者における間主観性指標に方法論に置く研究手法を、さらに研ぎすませたかたちで取組んでいく必要性を、筆者は痛感した。筆者の今後の課題としたい。

謝辞

終始熱心なご指導を頂いた九州大学大学院統合新領域学府ユーザー感性学専攻の南博文教授、清須美匡洋教授、藤枝守教授、人間環境学研究院の目黒実特任教授、人文科学研究院の後小路雅弘教授に感謝の意を表します。

芸術体験論の執筆にあたっては、多摩美術大学において文学論・20世紀美術論の御教授を承りました故・奥野健男先生、故・東野芳明先生に、広島 YMCA において絵画造形指導を承りました本家浩一先生、的場智美先生に、そしてアトリエ良の宇佐川良先生に、谷口勝子先生に、ここで改めて感謝の意を表したいと存じます。

アートセラピーの研究活動にあたり、友朋会嬉野温泉病院の中川龍治理事長にご指導を頂きました。心より感謝いたします。

アートセラピーの臨床実践にあたっては、議論を通じて多くの知識や示唆を頂いた、志村実生先生、齋藤考由先生、栗本美百合先生にはひとかたならぬお世話になりました。ありがとうございます。

各論文執筆にあたっては、ユーザー感性学専攻の院生の皆様を始め、芸術療法士養成塾の塾生の方々に多くの方々のご協力を頂きました。また心意伝承研究会等を通して秦恭子さんからは多くの刺激と示唆をいただくことができました。感謝の意を表します。

実践研究活動であるコミュニティアート・プロジェクトに協働して下さった福岡市箱崎地区の商店、行政、大学関係者の皆様、そしてともに共創体験プログラムを開催して下さった管崎宮の田村邦明権宮司、NPO 法人サニークラウドの中田早苗さんと戸田正さん、ギャラリーコンパの松尾さちさんと濱田庄司さん、廃在 PROJECT の香田小百合さんと塚本碧さん、佐々恭子さん、箱崎音学童の花田典子さんと幸松えみさん、ファシリテーターや出演者、企画運営者として実践活動を支えて下さった花田宏毅さん、新部健太郎さん、宇佐美陽一さん、マニシアさん、梅木繁良さん、山木圭さん、森美千子さん、赤阪護さん、黒木慶子さん、黒木起祥さん、大井実さん、小山田義浩さん、末廣真木さん、服部まなみさん、横田裕子さん、のえみさん、そして地元のアーティストの皆様には、感謝の念にたえません。

最後に芸術療法士養成塾の創設により、筆者を育てていただいた故・中川保孝塾長、そして未熟な私に一人からアートセラピーを教えて下さった患者さん一人一人へと、ここに深く感謝の意を表したいと思います。